

遊
魂

円地文子

遊魂

円地文子



新潮社版

© 1971 Fumiko Enchi Printed in Japan

遊^{ゆう}魂^{こん}

昭和四十六年十月十五日印刷
昭和四十六年十月二十日発行

著者・円地文子（えんちふみこ）

発行者・佐藤亮一

発行所・株式会社新潮社

郵便番号・一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話・東京二六〇局一一一一

振替・東京八〇八

金羊社印刷

新宿加藤製本

定価六五〇円

落丁・乱丁本はお取替えします

あとがき	蛇の 声	遊 魂	狐 火	目次
.....				
241	177	73	5	

装
画

加
倉
井
和
夫

遊

魂

狐

火

終

「群像」昭和四十三年一月号

黒い着物の衣紋を逆さに膝の上にひろげ、衿糸の片結びを解きながら、この冬もこれを着て出ることが又何度かあるだろうと志緒は思った。

十二月の声を聞く前後になると、寒さに移って行く季節の変化がこたえるのか、それまで持ち耐えているように見えた病人がばたばたと逝ったり、そうかと思うと、思いがけなくぼつりと、人中からぬけて行くように死んで行く人がある。

今日、葬式をすませて来た以前知合いの老婦人は長煩いの上に終り近くは意識も朦朧としたまま、半月ぐらいを過して亡くなったので、遺族も諦めはついている様子だったが、昔小説を書いて雑誌に掲載されたこともあった人だけに、生活に事欠かぬ隠居暮しの晩年にも原稿を書くのを唯一の慰めにしていて、書き溜めたものが、これこの通り沢山ありますと、悔みに行った時、志緒はその娘に当る人に居間に案内されて、積み重ねられた堆うすたかい原稿紙を見せられた。ものを書く業をよくも悪くも身につけて生きている女の一人として、志緒は亡きS夫人の老年まで書くこと

に執着していた心のくぐもりを慰めとはとれず、ひたすら圧して来る重たい力に息苦しくなつてその部屋を出た。

七十を過ぎたS夫人は恐らく自分の文章を活字にすることを念願して書きつづけていたのではあるまい。もしそうしたことを望んでいたとすれば、資力のある息子を持っている夫人にすれば生前に自費出版ぐらい安々と出来た筈である。そうしないままに、自分の心一つには藏つて置けない思いをS夫人はペンの先から原稿紙の枠の中へひたすら移し、確かめねばならなかったものであろう。心と言葉と、文字との間のつながりを頼りにしなければ生きられなかったS夫人の精神の構造は略々志緒自身のものであるが、その信頼感に無限によりすがるほどの支えは志緒にはおぼつかないのであった。心と言葉と文字が、時々、散々に飛び去り、ある時は冷たく睨みあい、あるときは敢えなく消えて行く瞬間を志緒は知っている。それは志緒が言葉を文字にかきよせ、一つの形にまとめ上げようとする作業に必死になる時ほど、屢々見舞われる現象であつた。行動は裏切らないが、言葉は瞬間々に裏切る危うさをうちに孕んでいる。そうしてそのことが言葉を無限に美しくもするし、無限に恐ろしくもする。

S夫人が言葉を文字に縛りこもうとしたのは、言葉の裏切りを堰きとめようとする藁しべで土を掘ろうとするようなはかない労力だったのかも知れない……そうした身に余る努力をも籠めて、S夫人の堆い原稿紙に費やした文字への愛着を老後の慰めと呼ぶならば、それはその言葉を素直

に受取ってもいいかも知れないと志緒は思った。

「年をとつてもものを書くなんて、恋するのと同じぐらい気味悪いことだ」

志緒は自嘲を籠めてひとりごとを言いながら、黒い着物を膝から滑りおとして、畳むでもなくひろげたまま、ぼんやり、衣裳畳だとうの前に坐つて、向いの白い壁を見ていた。

そこは志緒が仕事部屋に借りているアパートの部屋で、十五畳ばかりの洋間を半分は和風に仕切つて坐り机を据え、壁にも江戸時代の版画をかけてあつた。

「富嶽三十六景の内、遠江山中」と肩書きされた横物の図で、山峽やまがけの平地に組んだ足場に斜はすに置かれた太い角材の上に、木挽こびきがよじ登つて材木の切り目に背の重みをもたせるようにつく這い、鋸をひいている。そうしてその足場の高い丸太の梯形の間から、青い空を透かせて北斎独特の反り立つた富士が遠くそびえ、それをとり巻く帯のような雲と、近くで杣こまたちの焚く火の吹きなびく煙のさかんな勢いとが面白い対照に描き出されている。

北斎でなければ決して見られない構図が至るところに大胆にひろがっているながら、それは一向奇矯でなしに自然とも庶民の生活とも手をつないでいるのだった。この鋭くて、やさしい眼を持った画家が九十歳近くになって、「鼠一匹猫一匹描けなくなった」と嘆いたという声は文字に劣らない絵の恐ろしさを語っている呻きのようだ。

志緒は軽く首を振つて、憑きものをおとすように絵から眼を離したが、絵の中でうしろ向きに

なつて煙草を喫っているちゃんちゃんこを着た木挽きのほうけた髪のうしろつきがふと、一人の男を思い出させた。そうそうあの甚内本屋も死んだんだっけと思う。

一、二カ月置きに顔を出すとき、古い本の市に出るのなどを頼んで置いては持って来て貰っていた外まわりの古本屋で、うちのものは甚内本屋さんと呼んでいた中年男が、恰度寛政重修諸家譜の二十何冊本を納めきつて後、しばらく顔を見せないと思つていると、腎臓を悪くしていたとやらであつて亡くなつていたという話をついこの頃になつてきいた。そんな年でもなかったらしいのにと志緒は思い、いつも勝手口から入つて来て上りはなで木綿の風呂敷の包みを解いて本を取出し、代金を受取ると早々に歸つて行つた、甚内本屋の顔立ちなどは碌に思い出せないのに、後ろつきの髪のもさもさと刈られていないのだけが妙に記憶に残つていて、亡くなつたときいた時にも正直のところ届けてくれた本とその後ろつきの髪だけが頭に浮んで來たのであつたが、今になるとかえつてそれが死んだ人の印象をはつきりさせるようであつた。

そういえばあの広重の絵を売りたいという人を、紹介したのが甚内本屋だったのだ、と志緒は思い出すのである。息子二人と暮している未亡人で亡夫の集めた書画などをぼつぼつ売ることがあるらしいのだが、人目に立つのを嫌つて、くろうと玄人を中に入れたがらない。甚内本屋は、そこにある古い書籍を時々払つて貰うので、未亡人から広重の珍しい初版の一枚を見せられて、これを相当の値段で売つて貰えないだらうかと頼まれた。

「主人がひどく好きだった絵で、千紫堂の御主人には、今でも話せばすぐ引取ってくれるには極まっているんですけど……」

未亡人はその絵が行方知れずになることを厭がっていて、志緒が版画を好きらしいことをいうと、出来ればそういう人にとって貰いたいのだと言ったという。未亡人は甚内を信用していて、大切な絵を持たせて寄越した。それには大正時代の浮世絵の研究家で有名だった人の持主に宛てた手紙が添えてあって、自分はこの絵柄が広重には珍しく、妖氣を帯びている傑作なのに予て、心を惹かれていたが、あなたの手に入れられたものは、擬いない初刷といい、汚れのなさといひ恐らく現存の内でも最上の逸品であるうと折紙のような言葉が書いてあった。志緒はその専門家の手紙以上に絵が気に入ったので、甚内の取次いで来た値段でその絵を引きとった。その時にも甚内は手数料など当てにする風も見せず、殆ど志緒の家の部屋にも上らないままに二、三度両家の間を往来しただけであった。

そんな風だったので時が経つにつれて、広重の絵だけが手許に残り、それを売るときの未亡人の心情さえ今では志緒には忘れられ勝ちになっていたから、甚内本屋がその橋渡しであったことはまして、彼が亡き人の数に入ってしまった今になって、改めて思い出したような始末であった。

そうそうあの絵の額にいい桑の縁を上げましょうといつて甚内本屋が、それを持って来て、上

り框に腰かけて絵を入れて行ったことがあった……あれは絵の仲立ちをした礼に僅かな心づけをしたのに律義に返す心づもりだったらしい。それからもう何年も経っていたが、その後甚内は二度と本以外の売買の世話を志緒にすることもなかったし、何一つ立入ったことを聞くでもなく話すでもなく、注文された本だけを整えて来ては置いて行っていた。そういうつき合い方が何年つづいていても甚内本屋は志緒の内部に、本を持って来る人としてよりほかには入りこんで来なかったのである。彼の家族についても経歴についても志緒は全く知らないままに通じてしまったが、今となってみると一月か二月に一度顔を見ているだけで、何ということもなしに過ぎて来た甚内本屋の他人の中に向立入って来ない人柄が妙に懐かしく思い出されるのであった。生涯他人のようによそよそしくして、全くの他人とは違う印象を相手の中にちゃんと遺して行く、そういう人間も段々珍しくなっていくように志緒には思われた。

あの広重の絵はこしばらく家の納戸に入れてあった筈だが、今度行ったときに持って来てこの部屋に掛けようかと志緒はふと思った。

三人目に最近、亡くなった人は、S夫人や甚内本屋よりも、もっとずっと縁が薄くて、長い間、顔を見ることには慣れていたというだけの相手であった。それは志緒が時々参詣に行くある下町の大きい寺の本堂の内陣でお札の受附をしている老人であった。志緒は母親の代理で出かけて行ったのが縁になって、今でもその寺へよくお札を貰いに行く。信心があるというではなくて、そ

うしないと、何か身のまわりに悪いことの起りそうな不安が心にこびりついてしまったのである。祈禱料を受附けるために坐っている老人は色の悪いむくんだ顔に唇が白っぽく、髪は鉛色に厚くて、いつも木綿らしい艶のない黒の紋附の羽織を着ていた。もっさりとした口もとで、丁寧に領収書を書いてくれるのが例であったが、昨日月はじめに久しぶりに行ったとき、洋服に輪袈裟をかけた坊さんが坐っていたので、

「いつもの方はお休みですか」

ときくと、

「ああ、小倉さんですか、死にました。ついこの間……道を歩いていて、ぼっくり倒れて、それっきりだったんです」

とむしろ陽気に眼を輝かせて答えた。心臓に前から故障があるようだとは言っていたそうだが、死因がそれであったかさえ確かめる暇もないままに志緒はそこを出た。

「ついそのバスの通りでした」

と若い僧がのび上るようにして教えた大通りに出ると、恰度、曇り日の風のないままに寒い夕方近く、茶黒い鈴懸の葉が墨色の枝をはなれて、吸われるように地に落ちて行くのが見えた。どういう急な病気の症状であったのかも、まるでわからないながら、志緒にはその老人の死が枯れた葉の梢をはなれて行くようにひっそりと受けとれた。ひとによっては行き倒れのようにだと嫌う

かも知れないそうした死に方が、今の志緒には極く自然に死の中へ運び去られて行ったように思われるのである。

誰にしても老いて生きることの中には、時を紡いで行く辛抱が、生への執着と争って、おろそかならぬ重さに荷積まれている。ふと心をほぐせば、死の方へ自分をひきつけて知らず知らず安らがそうとしていることに気づかずにはいられないだろう。

志緒自身も、折々そういう誘惑にころよくわが身を憩わせそうになって、枯れた葉の音もなく枝からはなれるような無抵抗な魅力を意識してはねかえしているのであった。あのお札系の老人の死にも志緒はそういう甘美な誘惑を感じた。

志緒はそれを意識すると、何げなく忍びよった悪魔をはらいのけるような荒い動作で、前に置いてある喪服を取り上げ、はたはたとふるってから、畳の上に横に流して、手早く畳みはじめた。自分の周囲には、生きて行かなければならない条件がぎっしり詰っているのに、どうして行き倒れのような死に方に魅惑を感じるのかも、とっさには、呑みこめなかった。

やっぱり一人で暮すということのなかには、色々の想念が放恣にない交って来、行動を主張するのだろうかと思つた。

表向き、このアパートを借りたのは、向う二、三年の間つづけなければならぬ長い仕事のために、今の家では処理し切れない事が多すぎるといのが理由であったが、処理し切れないのは